

日 渡 遺 跡

—第6次調査—



平成20年(2008)11月

久留米市教育委員会

序

九州最大河川の筑後川に育まれた自然あふれる筑紫平野の中央に位置する久留米市は、恵まれた自然環境と住みやすい生活環境に囲まれ、古えより文化都市としての発展を遂げてきました。

今回報告いたします日渡遺跡は、周辺の調査成果により、縄文時代から中世までの長い年月に亘る遺跡であることが確認されています。近接する正福寺遺跡は縄文時代の遺跡として堅果類貯蔵穴が確認されるなど、市内でも重要な地域のひとつといえます。また、日渡遺跡第5次調査において青銅製の鏡が出土するなど、貴重な発見は数知れません。今回の調査の成果が今後の地域の歴史の解明の一端を担うことを願いますとともに、生涯学習の教材、学術研究の一資料として活用していただければ幸いと存じます。

本文になりましたが、発掘調査を行うにあたりまして多大なるご理解とご協力を賜りました久留米市農業協同組合（代表理事組合長 平田幸治氏）をはじめ関係各位に対し、心より厚くお礼申し上げます。

平成20年11月30日

久留米市教育委員会
教育長 石川 集充

例 言

1. 本書は、J A くるめ支所機能再編に伴う南部支店建設工事に先立って、久留米市教育委員会が受託事業として平成20年度に発掘調査を実施した報告書である。
2. 文化財行政に係る事務は久留米市教育委員会の委嘱を受けて、久留米市文化観光部文化財保護課が執行しており、調査は文化財保護課の塚本映子が担当した。
3. 本書に掲載した遺構図はトータル・ステーションを使用して作成し、塚本・大淵文子・田中とし子が作業にあたった。また遺物の実測および図面類の清書は塚本・畠中和子が行った。
4. 遺構の写真は塚本が撮影した。また、遺物写真は撮影機材トヨビュー45G II を用い、カラーリバーサルフィルム・コダックエタクローム100を使用して、塚本が撮影した。
5. 本書に掲載した遺構実測図は、国土調査法第Ⅱ座標系日本測地系2000を基に作成し、図面の方位はすべて座標北を示す。
6. 本書に使用した遺構表記は以下の略号による。SK…土坑 SP…ピット
7. 調査に関わる遺物や記録類は、久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
8. 本書に掲載した遺跡の略記号と調査番号は、HWT-006・200801である。
9. 本書の執筆は塚本・畠中が、編集は塚本が行った。

本文目次

I. はじめに	1
II. 遺跡の位置と環境	2
III. 調査の記録	3
IV. まとめ	8

I. はじめに

1. 調査にいたる経緯

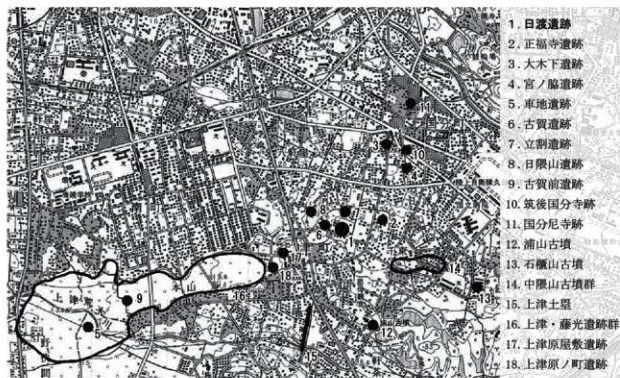
本調査は、平成19年12月28日付で、久留米市農業協同組合（代表理事組合長 平田幸治氏）より、福岡県久留米市国分町字古賀972外におけるJAくるめ支所機能再編に伴う南部支店建設に先立つ「埋蔵文化財包蔵の有無について」の照会がなされたことに端を発する。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地（日渡遺跡）内にあり、平成17年度に発掘調査を実施した日渡遺跡第5次調査の隣接地にあたる。第5次調査時に表探遺物として青銅鏡が出土していることから、追跡調査を実施し、関連遺構などが確認されるか否かの調査を実施する旨を伝え、本調査実施の協議を行った。調査範囲についての協議の結果、隣接する北側部分について調査を行うこと、東側については地形的な広がりなどから遺構の存在は希薄であると判断し、調査対象とはしないことで合意をした。

その後、平成20年4月2日付で原因者と久留米市長江藤守國との間で「日渡遺跡第6次発掘調査委託契約書」を締結し、平成20年4月3日より現地調査を実施する運びとなった。なお、整理作業は5月1日より5月30日まで実施した。

2. 調査の体制

日渡遺跡6次調査における体制は次のとおりである。

調査主体：久留米市教育委員会	教育長	石川 集充
調査総括：久留米市文化観光部	部長	中園 雄介
	次長	辻 文孝



第1図 日渡遺跡周辺の主要遺跡分布図 (1/25,000)

文化財保護課

課長 水落 哲也

課長補佐 立石 雅文・山口 淳・古賀 正美（課主査兼務）

事務主査 松村 一良・近澤 康治

庶務担当 本庄 ともえ

調査担当 塚本 映子

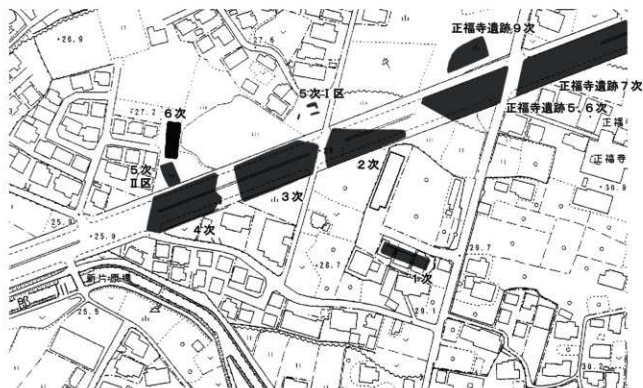
整理担当 畠中 和子・豊田 章子（非常勤職員）

発掘調査臨時職員

秋永絹子 安達真由美 大淵文子 佐藤朱美 田中とし子 堤嘉博 中野ゆみ 西ヶ迫久美子
藤井佳都子 三小田美智子

出土品整理臨時職員

山下留美



第2図 日渡遺跡第6次調査地点の位置と周辺地形図 (1/1,000)

II. 遺跡の位置と環境

日渡遺跡は、耳納山地の西端に位置する明星山系から西へ広がる洪積台地上、標高28m地点に所在する。この台地は多数の小河川によって開析され、周辺は谷と台地が複雑に入り組んだ地形をなし、それぞれの谷頭は飛岳の伏流水を源とする、良質な湧水点が現在でも各所にみられる地域である。

遺跡の所在する国分町は、地名の起こりとなった筑後国分寺が奈良時代に置かれるなど、歴史的にも重要な位置にある。以下、時代をおって概観したい。

縄文時代は、遺跡が急増する。日渡遺跡第4次調査では、包含層から押型文土器片や姫島産黒曜石剥片などの早期の遺物が出土している。縄文中～後期の阿高式土器などが採集された名入遺跡、後期の西平式土器を採集した大木下遺跡、前期の轟A式・曾畑式と後期の北久根山式土器が出土した宮ノ脇遺跡などがあるほか、正福寺遺跡第7次調査では、谷部分から後期の堅果類貯蔵穴などが出土するなど、遺跡が広範囲に展開する。

弥生時代では、前期の集落跡である車地遺跡、後期の土器が採集された古賀遺跡や立割遺跡、箱式石棺が発見されたと伝えられる日隈山遺跡、後期の集落跡である古賀前遺跡が確認されたほか、筑後国分寺跡の調査では中期末の堅穴住居が確認されている。また、日渡遺跡第2次調査では、堅穴住居から鉄鏃や鎌・刀子などの鉄製品が12点出土した。

古墳時代には、明星山系から派生する独立丘陵に多くの古墳が造営される。5世紀には、家形石棺内部に直弧文の線刻が施された浦山古墳、家形石棺を有する石櫃山古墳などの首長墓系列の古墳をはじめ、6世紀には、中隈山古墳群などの群集墳が営まれる。

飛鳥時代の遺跡としては、浦山丘陵西端部から本山丘陵の間、約450mにわたって築かれた上津土塁の一部が残存する。これは、高良山神籠石同様、白村江の敗戦を契機として築かれたものと言われている。

奈良から平安時代になると、8世紀頃に筑後国分寺・尼寺が造営される。昭和27年の調査以来断続的に行われる調査により、国分寺では講堂と塔や築地など、尼寺では掘込地業と版築積土などが確認されている。この他、天長年間(824～834)の創建が伝えられる天台宗鎮護山正福寺が所在する。更には、日渡遺跡では、私印と考えられる「朝」の字の印文が鋳出された銅印や越州窯系青磁碗などが出土しており、御井郡司や高良山五姓氏人として活躍した草部氏との関連が注目される。

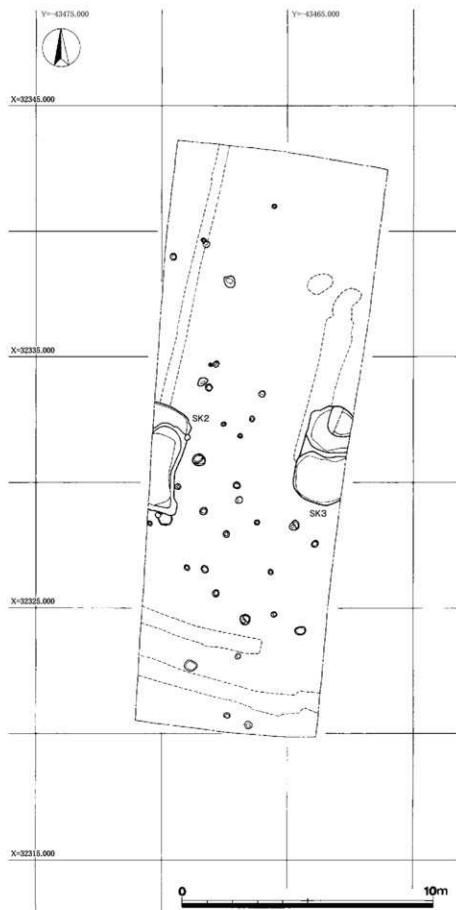
鎌倉・室町時代にはいと、国分寺・国分尼寺は13世紀中頃までには衰退していると記録されている。周辺にはこの時期の遺構は検出された例は少なく、正福寺遺跡第6次調査で13世紀の土坑が検出された程度である。室町時代の国分町は、文献では室町時代末期～戦国期にかけて、高良山大祝領など高良神職関係の領地が36町所在していたようである。日渡遺跡第3次調査では、居館と考えられる区画された大溝や掘立柱建物が確認されたほか、上津・藤光遺跡群で確認された大規模な屋敷地群や、上津原屋敷遺跡・上津原ノ町遺跡で確認された大規模な溝など、在地有力者の上津荒木氏に関連する屋敷地が一帯に展開していたと想定される。

III. 調査の記録

1. 調査の経過

遺構の広がりが見込まれ、なおかつ建物の基礎が入る部分190㎡を調査区として設定し、調査を実施した。平成20年4月3日より重機を用いて対象地の整地および草刈りを実施。4日より作業員を投入し遺構検出を開始。7日、降雨により作業中止。思わぬ雨量のため午後からポンプによる排水。8日・9日、遺構検出の続きを行う。表土中から黒曜石・縄文土器・青磁碗片などが数点出土。10日、降雨により作業中止。翌日は終日排水作業。14日、午前に排水作業を実施し、午後より遺構の掘り下げ作業開始。遺構の残りは悪く、大概の遺構の残りは浅い。同時に平板による測量、トータル・ステーションによる遺構の測量を開始。15日、遺構の掘り下げ及び遺構の測量作業。SK3

III. 調査の記録



第3図 日渡遺跡第6次調査遺構配置図 (1/150)

からは、青磁碗片のほか、輪の羽口が出土。16・17日ともに降雨により作業中止。18日、前日の降雨による排水作業。その後、遺構の掘り下げ。同時に測量作業。21日、午前中写真撮影に向けて調査区全体の清掃作業。午後、足場を組んで全景写真撮影。午後より個別遺構の撮影。撮影終了後は撤収のための片付けを実施。22日、午前中、測量作業のみ行い、午後から重機を用いて現場の埋め戻しを行い、現場での作業を終了。

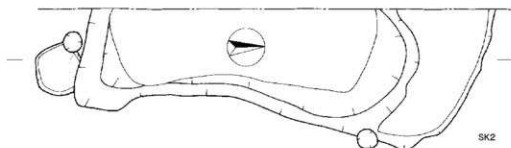
なお、遺構の測量はトータル・ステーションを用いて計測し、測量データは株式会社CUBIC社製ソフト「遺構くんCUBIC」にて編集している。その他、土層図については1/20で作成した。また、記録写真はモノクローム・カラーリバーサルともに6×7で撮影した。

2. 検出遺構

今回の調査において、ビット30基、土坑2基を確認した。遺物が殆どなく時期を決定づけるにはいたらなかった。表探遺物や表土出土遺物および

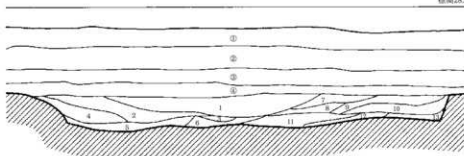


標高28.00m



SK2

標高28.00m

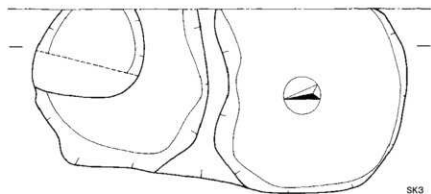


- ① 耕作土
- ② 灰土 (灰褐色土、黄褐色ブロック)
- ③ 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- ④ 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- ⑤ 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- ⑥ 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- ⑦ 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- ⑧ 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- ⑨ 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- ⑩ 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- ⑪ 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- ⑫ 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- ⑬ 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)

0 2m



標高27.30m



SK3

標高27.30m



- 1 灰褐色土
- 2 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- 3 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- 4 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- 5 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- 6 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- 7 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- 8 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- 9 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- 10 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- 11 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- 12 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)
- 13 灰褐色土 (黄褐色土、黄褐色ブロック)

第4図 SK2・SK3実測図 (1/40)

周辺の調査事例などから考えると中世の遺構を主とする遺構ではなかろうか。

土坑

SK2（第4・5・6図） 調査区の西側にて検出した土坑で、西側は調査区外に延びるため全容は不明であるが、平面プランは長軸4.1m×短軸1.4m以上の長方形を呈する。壁高は20～30cmを測る。遺構検出時の形状から単一の遺構でないことがみてとれたが、検出段階では確認することができなかった。このため遺構全体を数cm単位で掘り下げ前後関係を把握しようとしたが、明確な埋土の違いが判別出来ず、切り合い関係を確認する前に床面に達してしまった。そこで、調査区壁面に残る土層の観察により前後関係を把握することとした。観察の結果、長軸3.2m×短軸1.1m超の方形土坑（南側遺構）に切られる、確認南北長2.3m×1.5m余りの土坑（北側遺構）が確認された。出土遺物は少なく、時期差を把握する資料に欠けるが、両遺構とも中世を下らない時期の土坑と考える。出土遺物には土師器の坏片および土師器細片十数点がある。

SK3（第4・7・8図） 調査区の東側にて検出した土坑で、東側は調査区外に延びるため全容は不明であるが、平面プランは長軸4.0m×短軸2.0m以上の楕円形を呈する。壁高は5～15cmを測る。検出後、精査も兼ねて遺構全体を数cm掘り下げたところ、すぐに床面に達した。その際、床面の形状から単一の遺構ではなかったことが判明した。上面での確認が出来なかったため、床面と土層によって観察したところ、径約4.0m余りの楕円形の土坑に先行する、径2.0m前後の円形の土坑があることが北側に確認された。出土遺物としては、轆の羽口1点、須恵器の蓋片1点、土師器の皿片数十点、土鍋片数点、青磁碗片4点、四耳壺片1点がある。



第5図 SK2完掘状況（北から）



第6図 SK2土層断面（東から）



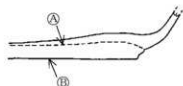
第7図 SK3完掘状況（北から）



第8図 SK3土層断面（東から）

3. 出土遺物

今回出土した遺物は浅コンテナー1箱程度である。周辺部からの流れ込みと思われる縄文土器片、弥生土器片などが数点確認された。他は、遺物の大半は土師器であり、数点の須恵器片がある。(塚本)



第9図 接着状況模式図

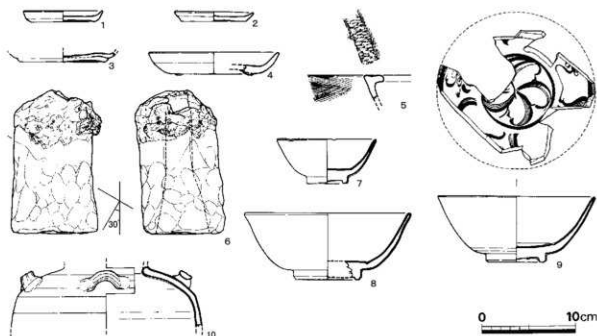
1・2は土師器の小皿で、共に内面に門歯痕が見られる。3は土師器皿の底部で、断面には接合痕のような張り合わせ部分が認められる。詳細に観察すると、皿の底部(A)および接着部の上面および接着部の上面(B)の両面にそれぞれ糸切り離し痕が認められる。底部の中心を見ると、貼り合わせられた部分の上部が1mm程度と非常に薄く、この部分で一度切り離されたとは考え難い。また前述の通り、Bの部分にも糸切り離し痕が認められることから、切り離しに失敗したため新たに粘土を継ぎ足して補ったとも考え難い。このことから製作工程を推測すると、糸切り離しを行った後の粘土柱の上面に、別の粘土を新たに継ぎ足し、その粘土を用いて次の土器を製作した際に、偶然接合部の直下で糸切り離しが行われた結果、このような痕跡が生じたものと考えられる。つまり模式図のAの部分、この土器を成形して粘土柱から切り離した時の糸切り痕であり、Bの部分は、一つ前の土器を切り離した後の粘土柱に残った切断面と考えられる。(註)4の土師器の皿にも底部に粘土の付着があるが、土器を切り離した時に飛び散った粘土片が貼り付いたものと思われる。5は逆L字形を呈する土鍋の口縁で、上面には縄目の圧痕が施される。6は轆轤口の完存品。先端部には多量の鉄滓が付着し胴部には指頭圧痕が残る。羽口内面の形状は、裾部から中央にかけて次第にすぼまり、中ほどから先端は円筒状を呈する。孔径は2.8cm、比熱による変色の状態から装着角度を測定すると、30°であった。7は龍泉窯系青磁の小碗である。口縁端部に輪花を有し、現存するのは2箇所であるが、本来は5箇所施されていたと思われる。8、9は龍泉窯系青磁の碗。8の高台部畳付けおよびその内部は露胎で、口縁端部は外反する。9は櫛刀によって体部内面を5分割し、その中に飛雲文が描かれ、見込みには花卉文を施す。口縁部の殆どを欠損するため、輪花を有するか否かは不明である。10は白磁の四耳壺。肩部の破片で、耳は1箇所のみ残る。胎土は精良であるが灰色で、青磁に使われる物に近く、釉色はオリーブ灰色を呈する。(畠中)

(註)第9図参照。この資料については、同僚の白木守を通じて太宰府市教育委員会の中島恒次郎氏に実見をいただき、製作工程に関して様々なご教示をいただいた。

第1表 出土遺物一覧表

遺物 No.	出土遺物 種別	器種	法 量 (cm)			色 澤		器 型		胎 土	備 考	登録番号
			口徑(長)	底徑(幅)	器厚(厚)	外面	内面	外面	内面			
1	SK3	土師器	小皿	(8.4)	(6.8)	(1.1)	橙	橙	ヨコナデ	微砂粒(雲母、長石、赤色粒土)	底部糸切り+板目	200801 -000004
2	SK3	土師器	小皿	8.4	6.6	(0.9~1.1)	黒・橙	浅黄橙・橙	ヨコナデ	微砂粒(長石、雲母)	底部糸切り+板目	200801 -000002
3	SK3	土師器	皿	—	(9.2)	(0-85)	にぶい黄 橙	橙	接合ナデ	ナデ・押さ え	底部糸切り+板目	200801 -000003
4	SK3	土師器	皿	(13.8)	(9.8)	(2.4)	にぶい褐 色・橙	橙	ヨコナデ	ヨコナデ	底部糸切り	200801 -000005
5	SK3	土師器	土鍋	—	—	(2.8)	黒褐色	褐灰色	ヨコナデ	刷毛目		200801 -000006
6	SK3	土師器	轆轤口	8.8~ 8.5	8.8~ 9.3	15.1	灰黄褐色	にぶい黄 褐色	ナデ・押 さえ	ナデ・押 さえ		200801 -000001
7	SK3	青磁	小碗	(10.5)	4.3	(4.7~ 4.9)	(軸) 明緑灰	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	龍1-1b類	200801 -000007
8	SK3	青磁	碗	(17.6)	(7.2)	(7-1)	(軸) 黄褐色・灰オリーブ	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	龍1-1a類	200801 -000008
9	SK3	青磁	碗	(16.6)	(6.4)	(6.9~ 7.0)	(軸) 灰オリーブ	回転ナデ	櫛描文	微砂粒	龍1-4類	200801 -000009
10	SK3	白磁	四耳壺	—	—	(6.4)	(軸) オリーブ灰	回転ナデ	回転ナデ	精良		200801 -000010

() 内の数値は復元値・現存値を示す。

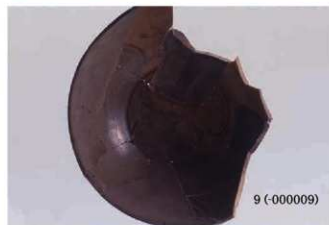


第10図 SK3出土遺物実測図 (1/4)

IV. まとめ

今回実施した日渡遺跡第6次調査は、平成17年度に調査した第5次調査時に出土している青銅鏡の追跡調査を主目的として実施したものであった。表採資料であったため、今回の調査によって周辺の状況が探れるかと期待されたが、関連する遺構は確認されなかった。以前の地形から予測すると、周辺は谷部を挟んだ地域であり、台地端部にあたると考える。「東合川・野伏間線」道路建設の際調査を実施した、第3次調査付近が周辺において最も高い地点であったそうであるが、地元の人の話によれば付近一帯広範囲にわたり1m程の地下げが行われ、水田開拓のために土地を平坦化したとの話があることから、その際の流れ込みである可能性が最も有力な考えであろう。

第6次調査は遺物の出土量が僅少であるため、明確な時期を決定する材料にかけるものの、僅かに出土した遺物や周辺の調査成果などから中世頃の所産の遺跡であろうと考える。周辺の調査において、縄文時代の遺跡の広がり確認されているが、今回数点出土した縄文土器の出土状況などから考えると、第6次調査地点における縄文時代の集落の広がりはないものとする。周辺の削平が報告されている現状では弥生時代の遺跡の広がりについては不明ではあるが、第5次調査において弥生土器を包含する遺構が確認されており、弥生時代には集落の端部にあたると考える。出土遺物を見てみると、特筆すべきものとして、櫛の羽口が出土したことがあげられるであろう。残念なことに、遺構中からは羽口以外に製鉄関連の遺物が出土していないため、出土遺物の性格を測りかねる。床面に焼土痕のないこと、埋土中に1～2mm大の炭片が多量に含まれた層が確認されていることなどを考慮すれば、廃棄土坑の可能性が高いと考える。しかしながら、周辺には古墳が点在する他、中世には周辺を治めていたとされる上津荒木氏が記録に残り、発掘調査においても、屋敷跡群などが発見されるなど、この地域の重要性が垣間見え、今後、周辺において製鉄などの工房が発見される期待は大きい。周辺の調査が進み、状況の解明が待たれるところである。(塚本)



第11图 SK 3 出土遺物 (写真)

報告書抄録

ふりがな	ひわたしいせき ―だい6じょうさー
書名	日渡遺跡 ―第6次調査―
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第276集
編著者名	塚本 映子・畠中 和子
編集機関	久留米市 文化観光部 文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL 0942-30-9225 FAX 0942-30-9718 E-mail : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	2008(平成20)年11月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
ひわたしいせき 日渡遺跡 第6次調査	く る め し こ ぶ ま ち 久留米市国分町 あぶ こ が ほ か 字古賀972外	40203	030633	33° 17′ 26″	130° 31′ 60″	20080403 ～20080422	190㎡	J Aくるめ支所 南部支店建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項	
日渡遺跡 第6次調査	集落跡	中世	土坑 ビット	2 基 30基	黒曜石、縄文土器 弥生土器 青磁碗、土師器、須恵器		調査区西より確認 の土坑より輪の羽口 が出土した。遺構の 残存が悪く、また鉄 滓等その他の関連遺 物は皆無であった。	
第5次調査時に出土した青銅鏡の出土状況を確認することを主眼に実施した調査であったが、後世の削平により遺構の残りが悪く、関連する遺構の存在は確認できなかった。調査区西側にて確認したSK3より輪の羽口が1点出土した。周辺の遺跡からは鉄器の出土も確認されており、これらに関係の深いものではとの見解ももてるが、遺構の残りが悪く、出土遺物も少ないことから、製鉄関連の遺構と断言するには資料に乏しい。周辺での事例が待たれる。								
土木工事の届出日			平成20年1月17日			遺物の発見日		平成20年4月28日 (20文財第128号)

* 北緯・東経は「日本測地系2000」に基づく

日渡遺跡

―第6次調査―

久留米市文化財調査報告書 第276集

平成20年11月30日

発行 久留米市教育委員会

福岡県久留米市城南町15-3

編集 久留米市

文化観光部 文化財保護課

印刷 中村印刷株式会社

久留米市梅満町972